

独自技術で廃瓶を砂に

千葉でいきる
SDGs
関心高まる



発行所 郵便番号 260-0013
千葉市中央区中央4丁目14番10
千葉日報社
電話 043(222)9211
©2022

1月6日(木)

紙上公開模試

これまで埋め立て処分されていた色付きガラス瓶を回収し、安全で柔らかい人工砂に変える銚子市の「ガラスリソーシング」。20年以上前に伊藤憲一会長(71)の「もったいない」を原点とした同社は現在、サプライチェーン(供給網)を巻き込んだSDGs推進の流れをくみ、全国の自治体や企業から熱い視線を向けられている。

銚子 ガラスリソーシング

赤坂修社長(68)の協力によって事業化まで約10年を要したという独自技術で、ガラスを柔らかく粉砕。手に刺さらない安全な人工砂「造粒砂(ぞりりゅうさ)」を開発した。

間近で見ると色とりどりのガラスがきらめく造粒砂だが、現在は主に地盤改良材として活用されている。水分を含みやすい自然の山砂に比べ透水性に優れており、液状化防止などで道路の下などに敷くケースが多い。同社によると、国土交通省の大規模事業用にも発注を受けている。

原点は「もったいない」精神

「造粒砂を出荷するたび、今日も山を守れたとうれしくなる」。漁業関係者の多い地元では、地球温暖化など気候変動に関する悲痛の声を聞く機会も多い。

伊藤会長は「SDGs推進は急務」と使命感を持ちながらも、「一つの会社で17つのゴールを達成するのは難しい。中小企業はまず自分たちの事業を見直し、できることに取り組んでいくしかない」と呼び掛ける。

同社は工場内のバイオマス発電装置など、設備面の環境対策にも着手した。SDGsの最後17番目のゴールは「パートナーシップで目標を達成しよう」。協力して全てのピースをそろえるには、「難しく考えなくて良い」というガラスリソーシングの信念がヒントになりそうだ。



ガラスリソーシングが販売する、廃棄の色付き瓶を加工した人工砂「造粒砂」。安全無害に特殊加工されている。2021年12月22日、銚子市